

になると縫合の嵌合度を表すフラクタル次元 (D) は大きな値となっていた。縫合の複雑性は成長に伴い増加しており、頭蓋冠の発育における部位差はそれぞれの縫合での D 値の変化に影響を与えていることが考えられた。

【結 論】頭蓋冠のフラクタル解析による縫合部の定量的評価により、成長発育を評価できる可能性が示唆された。

3) 手用SSファイルを用いた根管形成におけるトルクコントロールの効果

○東 春生, 鳥居 祥司, 高橋 慶壮
(奥羽大・歯・歯科保存)

【緒 言】古典的なステップバック法では、手用ファイル操作時に回転角度を90度あるいは90度以下と記載されているが、これはファイルの破折防止が目的で、根管形成に及ぼす効果が科学的に検証されてはいない。すなわち、ファイルの回転角度を制御するという概念は欠落している。

本研究の目的は、ステップバック法による根管形成においてファイル操作時の回転角度を変えた際の根管形成前後の形態変化をマイクロ CT 解析し、トランスポート量および根管内壁の切削量を比較・検討することである。

【材料と方法】天然歯を鑄型にして作製した上顎犬歯の透明根管模型25本を試料に用いた。根管形成前の全ての模型をマイクロ CT 撮影した。根管形成法は手用 SS ファイル (K ファイル) を用いたステップバック法を選択した。ファイルの回転角度を明視化してファイルを操作した。次に、根管形成時のファイル操作時の回転角度を15°、30°、60°、90°、180°回転群に設定し、turn & pull 運動で根管形成を実施した (各 n=5)。各模型の根管形成前後の画像を解析し、根管の体積、形態変化およびトランスポート量を解析した。統計処理には ANOVA を用いた。

【結 果】180°回転群では、根管系を逸脱した過剰な切削が顕著で特に根尖孔部で根管形成前後の形態変化が大きかった。

根管形成前後の中心点間距離の変位は、180°回転群が、根尖孔部の位置で他の回転群に比べ有意に大きく ($p<0.05$)、1 mm の位置で15°、30°、

60°回転群に比べ有意に大きかった ($p<0.05$)。

【考察および結論】ファイル操作時の回転角度が30°の際に根管の形態変化およびトランスポート量が少ないことから、回転角度を30°前後に設定することで根管本来の形態を保持した根管形成が可能になる。

4) 地域医療支援歯科の発足とその展望

○山家 尚仁, 佐藤 健太, 佐藤麻里恵
北條健太郎, 奥座 崇史, 保田 穰
成田 知史, 小松 泰典, 渡邊 崇
鈴木 史彦, 清野 晃孝, 佐々木重夫
瀬川 洋, 杉田 俊博

(奥羽大・歯・附属病院・地域医療支援歯科)

【緒 言】厚生労働省は在宅医療への推進を掲げており、本院では在宅での一般歯科診療、口腔ケア・摂食嚥下リハビリテーション、全身麻酔下でなくても対応できる障がい者に対する歯科処置などすべてのニーズに応えるための科として地域医療支援歯科を発足したので、平成28年4月から10月までの当科での業務概要および今後の展望を報告する。

【概 要】平成28年4月から10月までに訪問歯科診療92件、嚥下内視鏡検査37件、摂食機能訓練83件、経管栄養入所者の口腔ケア56件、ミールラウンド168件、食後の口腔ケア介助560件、障がい者歯科治療・全麻113件、鎮静1件などの業務実績および歯科医師国家資格以外の専門資格取得者の確保、増員を目指すといった当科における今後の課題と展望を提示した。

【考 察】今後、更なる高齢化が進み、高齢により通院が困難な患者、障がい者や認知症などで通院が困難な患者、歯科のない病院からの歯科処置及び口腔ケア依頼の増加が予想される。そこで、郡山市内の病院との連携を強化し、この様な患者に対応できるよう当院も環境を整える必要があると考える。

また訪問診療は、通常の外来患者に対する診療とは大きく異なり、診療器材、診療姿勢、光源を含めた周囲の診療環境や患者の基礎疾患や現病歴など多くの問題を訪問先で考慮しなければならない。その中で、最も重要な事項は安全対策であり、

その為には多職種が連携できる環境が必要となる。安全対策の一環として、歯科麻酔科研修による気管内挿管実習や、歯科医師国家資格以外の専門資格取得により更なる向上を目指す必要性を感じた。

【結語】発足して間もないため必ずしも十分とは言えない対応であるが、地域社会に貢献出来るよう更なる準備を進めていくつもりである。今回、平成28年4月から10月までの当科での対応と症例を報告した。

5) デジタル機器を応用したインフォームドコンセントについて

○渡邊 崇, 山家 尚仁, 佐藤 健太
佐藤麻里恵, 北條健太郎, 奥座 崇史
保田 穰, 成田 知史, 小松 泰典
鈴木 史彦, 清野 晃孝, 佐々木重夫
瀬川 洋, 杉田 俊博

(奥羽大・歯・附属病院・地域医療支援歯科)

【緒言】医療行為を行う上でインフォームドコンセントは必須である。一般開業医においてインフォームドコンセントを行う一つとしてユニットにディスプレイが備えられマイクロスコープやレントゲン画像などの視覚媒体を用いることで、患者の理解度を深めることが多くなってきている。しかし本院ではそのような視覚媒体が少なくかつその効果が不明である。そこでその視覚媒体が患者理解度にあたる影響について比較・検討した。

【概要】現在、演者は本院においてルーペを用いて診療を行い、必要に応じて患部をカメラで撮影しタブレット端末で説明する方法を行っている。しかしながら、これら一連の作業は煩雑でありかつ時間を要する。そこで、マイクロスコープと患者説明ツールを用いた方法とで患者理解度が異なるか否かをVAS (Visual Analogue Scale: 以下VAS) を用いて比較検討した。

その結果、VASにおいてルーペを用いて診療を行い、必要に応じて患部をカメラで撮影しタブレット端末で説明する方法では平均67.4mmであるのに対し、マイクロスコープと患者説明ツールを用いた方法において平均98.0mmと短時間で効率的な説明を行うことが可能でありかつ高い患者理解度が得られた。

【考察】歯科医師と患者の間には民法656条に基づく診療契約 (準委任契約) における義務, すなわちインフォームドコンセントが必須となる。インフォームドコンセントにおける一番の問題点は歯科医師と患者の間の決定的な知識の格差であり, この格差を埋める, 患者の十分な『理解』が重要であると言われ, できる限り易しい言葉や表現方法を選ぶ必要がある。そこで今回, その『理解』を深める目的として表現方法の一つである視覚媒体としてマイクロスコープと患者説明ツールを用いたことで, 患者の理解度が向上したと考えられた。よって本院でも今後のデジタル化を見据えて, マイクロスコープや患者説明ソフトの運用方法の多様化を検討する必要があると思われる。

【結語】今回, マイクロスコープと患者説明用ソフトを用いてインフォームドコンセントを行うことで, 高い患者理解度を得ることができたので報告した。

6) 2016年慶熙大学国際交流報告

○林田 明大¹, 遠藤 凌介¹, 金子 正慶¹
小木田勇馬¹, 斉藤 温子¹, 笹井 真澄¹
中島千絵子¹, 竜 立雄², 山崎 信也³
大野 敬³

(奥羽大・歯学部学生¹, 奥羽大・歯・成長発育歯², 奥羽大・歯・口腔外科³)

【緒言】2016年8月1日から8月7日まで本学姉妹校である韓国慶熙大学歯学部とその関連病院で研修を行った。本学から計7名の学生が参加した。研修内容として, 大学病院と関連病院内での各科の見学と講義, 英語での自己紹介, 大学キャンパス内の見学, 慶熙大学の先生, 学生を含めての交流会を行った。これらの交流内容について発表を行った。

【研修内容】大学付属病院においては, 歓迎会で学生による英語での自己紹介を含めたプレゼンテーションを行った。さらに各科の見学では診療の様子や研究内容, 過去の症例についての説明を聞いた。特に放射線科では3D スキャナーを用いた顔面の分析, 矯正科ではインダイレクトボンディング法で実際に使われた模型や, 最新の機能検査, 歯科矯正用アンカースクリューを用いた症